マイストーリー

尚志高サッカー部監督　仲村 浩二　9

被災地代表の思い胸に

「もう一緒にサッカーをやれないのかな」

震災と原発事故が起きた2011（平成23）年3月。パスを13時間走らせ、首都圏出身の部員を親元に送り届けた。保護者の安堵の表情とは裏腹に、私は「福島に戻らず転校してしまうかも」と、最悪の事態ばかり考えた。

それでも、生徒たちは「尚志でサッカーをやります」と言ってくれた。その言葉を受けて3月27日、会場を提供してくれた母校の千葉県・習志野高で練習を再開した。サッカーを通した強い絆に感謝しながら、生徒と共に練習できる喜びをかみしめた。

郡山に戻ってきたのは4月に入ってから。しかし本当の苦難はそれからだった。

「大丈夫ですか」。放射線の影響を問い合わせる保護者からの電話が毎日のように入った。県から提供された情報を頼りに説明したが、不安を拭えず転校生や入学辞退者もいた。

練習も、屋外では1時間30分に時間を限られ、雨が降れば即中止。「本当に大丈夫なのか」という気持ちが正直拭えなかった。

震災を乗り越え、県勢で初めて「国立」のピッチで戦った選手たち。彼らの懸命な姿は県民に勇気を届けられたのでは

そんな時、ドイツで開かれた女子ワールドカップで、なでしこジャパンが初優勝した。攻め立てられても決して諦めなかった選手。私はその姿に感動し、勇気をもらった。

「福島のなでしこジャパンになろう」

自分たちも頑張って戦えば、震災から立ち上がろうとしている人たちに勇気を届けられるのではないかと考えた。

メニューに工夫を凝らし、短時間でも濃密な練習をこなした。初めて参入したプレミアリーグでは攻撃や守備の戦術をいろいろ試し、持ち味を捨ててでも相手に合わせて変化することを学んだ。

こうした積み重ねが血肉となって全国高校サッカー選手権の予選で、避難中の富岡高を破って優勝。被災地代表としての思いを忘れずに本大会を戦い、県勢初の3位となった。

もちろん県民の皆さんの応援が力になった。一方で選手が懸命に努力して勝ち取ったのも事実。「勇気を届ける」目標を成し遂げた生徒を誇らしく思う。（聞き手　佐藤智哉）

ひと　human

マイストーリー

尚志高サッカー部監督　仲村 浩二　10

学校の枠超えて育てる

応援してもらえるチームづくりというのは学校内だけにはとどまらない。地域からも支持される必要がある。

尚志高が全国高校サッカー選手権に出場できるようになった頃、主力は親元を離れて寮生活を送る首都圏出身の生徒だった。

当時、県内の有望選手は富岡高に入学していた。「富岡に負けたくない」。その思いで私は、郡山市に来てでもサッカーに打ち込みたいという県外の選手を受け入れた。

今は越境入学が当たり前だが、昔は県外出身者が多いと違和感を覚える人もいた。「県外の生徒だけでは駄目なんだ」と思い始めた。

そこで作ったのが中学生年代のクラブチーム「ラッセル郡山」だ。2009（平成21）年から尚志のグラウンドで活動を始めた。高校でも通用するよう、選手個々の特徴を引き出すことを念頭に置いている。選手は尚志だけでなく、ほかの高校に進んでからも活躍していて、対戦するのが楽しみになっている。

尚志のグラウンドを借りて行う取り組みには、12年に設立した小学生向けの「ラッセル・プリメーロサッカースクール」もある。

サッカー以外のスポーツや遊びも取り入れて、人工芝グラウンドで思い切り体を動かし、運動する楽しさを感じてもらっている。この子どもたちの中から将来、サッカーはもちろん、いろいろなスポーツで活躍する選手が誕生してくれればうれしい。

「福島に何かを残したい」。そう思って尚志の監督になり21年。学校という枠を超え、尚志がある郡山市大槻という地域全体をサッカータウンにしたいと思うようになった。

大槻には元々、郡山西部サッカー場がありさまざまな大会が開かれてきた歴史がある。車で短時間に移動できる範囲には、サッカー施設も多い。親善大会を開くことが可能だ。

大会だけでなく、合宿にも全国から来てくれるような地域にできれば、地域経済も活性化するし、「福島は元気です」と伝えることもできる。サッカーを通して地域に貢献していきたいと思う。（聞き手　佐藤智哉）

尚志高のグラウンドでサッカーや運動の楽しさに触れる小学生。学校のある大槻をサッカーが好きな子どもたちを育てる拠点にしていきたい

ひと　human

マイストーリー

尚志高サッカー部監督　仲村 浩二　11

家族の存在が心の支え

「クマ、遊ぶよー」

生徒に甘く見られないよう童顔の見た目を隠すためひげを生やしているからか、小学生の一人娘は、私を「クマ」と呼ぶ。

練習や試合、遠征で家を空けることが多くても、家に帰ると懐いてくる。少しでも時間があると、一緒にバドミントンをしたり買い物や映画を見に行ったりする。サッカーのことを忘れ、娘と過ごす時間に癒やされている。

そんな幸せなひとときを過ごせているのは妻の存在が大きい。

練習で朝早く出掛けて帰りも夜遅い。土日もなく、夏休みなども遠征で1週間以上帰らないこともしばしば。子育てなど普通なら夫婦が共同で行う家庭のことも全て妻に任せっきり。それでも愚痴をたまに言うだけで、仕事に集中できる環境をつくってくれる。

妻との出会いは運命的だ。尚志高の監督に就いて教年後、家を建てる予定の同僚の先生に付き添って郡山市内の住宅展示場に出掛けた。その時に接客してくれたのが妻だ。

子育てに関われる時間は少ないが、一人娘と過ごす時間が一番の癒やしになっている。妻をはじめ、家族の支えに後押しされて仕事に集中できている

サッカーが好きだと話した彼女と意気投合して連絡を取るようになった。そうして2005（平成17）年に結婚。併せて新居も建てた。妻はいつもさけて「家の契約書と一緒に婚姻届を入れていたら、夫が判を押した」と知人たちに話すが、あながち間違ってはいないから、さすがだ。

でも彼女との結婚が、監督として運気を上げるきっかけだったかもしれない。尚志はその年に全国高校サッカー選手権の県予選で決勝に進み、翌年には予選に優勝して選手権に初めて出場することができた。

「私と結婚したから勝てるようになったのよ」。妻からよく言われるが実際、彼女の支えなしには、今の自分はいないとも思う。

故郷の千葉で暮らす両親にも感謝している。両親は兄夫婦、おいと一緒に県予選の決勝と選手権に欠かさず応援に来てくれる。

家庭を顧みたり、親孝行もろくにできない私にとって、大舞台で勝つことが私なりの恩返しだと思っている。（聞き手　佐藤智哉）

マイストーリー

尚志高サッカー部監督　仲村 浩二　12 完

生徒と共に走り続ける

新チームになってから生徒に言い続けていることがある。

「高校選手権で3位になったのはおまえたちでない。先輩たちだよ」

7年前の苦い思い出がそう言わせる。

2012（平成24）年、3年連続5度目の出場となった全国高校サッカー選手権で初めて3位となった。しかしその年の秋、県予選の準決勝で敗退。当時の生徒は「失敗は試練ではない。成功こそ試練だ」と言い残した。

高校サッカーは、常に謙虚にひたむきに努力しなければ、良い結果を残せないということだ。それは私の教訓になっている。

今年は、5年連続10度目の選手権出場で再び3位に入った。先週開幕した高校生世代で国内最高峰のプレミアリーグでは、7年ぶりの参戦ながら初戦に勝ち、幸先良くスタートできた。生徒には7年前のような苦い思いを味わわせたくない。だからこそ先輩たちが残してくれた教訓を言い続ける。

生徒が私にくれるのは教訓だけではない。毎年、たくさんの「贈りもの」もくれる。

12年に選手権3位になった生徒は全国制覇という目標を、そして今春の卒業生は尚志サッカーを確立するためのヒントをくれた。

それは、ポジションが同じでもタイプの違う選手と代えれば、チームの特徴を変えられること。パスサッカーに加え、どんな相手にも対応する変幻自在さ。それが全国制覇を果たすための新たなスタイルだと教えられた。

こうした贈りものを残せるのは人間として大きく成長する多感な高校生だからだろう。

毎年生徒が替わり、指導者としての力を試されるようなことも起きる。いきなり辞めると言い出す生徒や、試合中に泣き出したりする生徒もいる。私も指導者、そして人間として成長していかなければならない。

生徒の生きる道を一緒に探し、成長する姿を見られるのが高校サッカーの魅力だ。だから私はプロではなく、高校サッカーの監督であり続けたい。（聞き手　佐藤智哉）

※16日からは、小高ワーカーズベース社長の和田智行さんが登場します。

高校サッカーの監督である限り、選手権での「全国制覇」が目標だ。まずプレミアリーグで尚志の新たな歴史を刻めるように頑張っていきたい

ひと　human